別紙様式２－２

平成 29 年度「特別支援教育に関する実践研究事業（次期学習指導要領に向けた実践研究）」成果報告書

受託団体名	横浜訓盲学院

Ⅰ　概要

１　モデル校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
学校法人横浜訓盲学院	特別支援学校	視覚障害	横浜訓盲学院（よこはまくんもうがくいん）

２　研究課題

視覚障害と聴覚障害を併せ有する盲ろう幼児・児童・生徒の自立活動とアセスメント
―パーキンス盲学校国際部門との連携を通して―

３　研究の概要

「盲ろう」の子どもたちは視覚と聴覚の両方に障害を有するため、基本的な人間関係の形成、感情の交流、コミュニケーション方法の獲得、概念の形成、出来事の全体像や因果関係の理解などが非常に困難になる。盲ろうの幼児児童生徒の自立活動をすすめるにあたり、盲ろうという障害に配慮したアセスメントを通して、適切な実態把握、実践、評価のありかたについて研究を行う。

なお、アメリカのパーキンス盲学校には数十名の盲ろう児が在籍している歴史と実績があり、盲ろう教育にかかる高い専門性が蓄積されている。パーキンス盲学校国際部門（略称ＰＩ）の協力を得て、パーキンス盲学校において用いられているアセスメントの考え方および方法を活用しその有効性および制約を確かめ、その成果を日本の盲ろう教育に資することを目的とした。

初年度は、まず、ＰＩがインドネシア教育省と連携して行った10日間の盲ろう教育集中研修に参加し、ＰＩが有する盲ろう教育の専門性と研修資源について情報を収集し、その中から日本の状況に適したものを探った。

次いで、ＰＩ専門家を日本へ招聘し日本の状況を紹介し協議を行った。これまで本校で見落としていた盲ろう教育に必要な知識と技術について有益な知見が得られた。さらに、乳幼児期と学齢期のアセスメントおよび取り組みそれぞれについて実践的な知見が得られた。これらを総合して第二年度の研修内容とそれを踏まえた実践研究の内容や方向性について検討した。

４　研究の成果

標準化されたアセスメントについては、視覚・聴覚・運動・摂食等についてはある程度用いられる。しかし、コミュニケーションや概念の獲得および環境の理解については、保護者のインタビューを土台に１）当該児童が安心できる人的・物的環境の中、安定した姿勢で、馴染んだ遊びやルーチンの予測とコミュニケーションのやりとりについて、家族がかかわる場面を観察すること、２）豊かなやりとりを創出できる家族以外の専門家（盲ろうを理解している有能なコミュニケーション・パートナー）が係る場面を観察すること、３）必要な合理的配慮がない場合と、ある場合のちがいを観察すること等が大切にされている。できないことではなく、「できること、できつつあること、できそうなこと」を見出すことがカリキュラムにつながる。

盲ろうという障害がどのように広範な課題を当該児童にもたらし、どのような点が見落とされがちで、どのような配慮があればよいのかについての基礎知識を評価者は実践的に理解し、それを盲ろう児との係りで体現できるような研修を受けていることが重要であることが確認された。盲ろうについての基礎研修の充実と必要性が確認された。

５　課題と今後の方策

第一年度の研究をもとに、ＰＩの専門家を日本に招聘し、夏季に一週間の研修を行う。事例としては本校に在籍している盲ろう幼児児童生徒とご家族の協力を得て、より具体的な研修を企画する。その場合、異なるニーズをもつ異なる年齢層（乳幼相談・幼稚部・小学部）の児童を念頭において行う。なお、視覚障害が重度の盲ろう幼児・児童を念頭において実施する。